

初習言語教育雑感

佐藤 邦彦

今から思えば1998年、私が立教大学にスペイン語担当教員として着任した当時、全カリはまだ満一才を迎えたばかりのヨチヨチ歩きだった。何年にも及ぶ努力の結果作り上げられた制度ではあるが、制度を走らせてみてはじめて見えて来る問題、新制度に切り替えたが故に生じてくる問題もあったはずで、私がこれまで過ごした数年間は、いわば新制度の実質的な練り上げの時期であったように思う。そんな時期に言語教育の現場に立ち、また2000～01年度にかけて全カリ言語部会専門委員を拝命したことは、私個人にとっても有意義なことだったと思っている。全カリは今満6才を迎えようとしている。通常の日本人であれば小学校に入学する年齢だ。初習言語カリキュラムについても、これまでを振り返り、これからのあり方について考えてみるべき節目に到達したと言っても良いだろう。

振り返る、と言っても、現場の担当教員の感覚としては、とにかく目の前に教えるものがあり教える相手がいる。授業は進み学生の様子も変化して

いく。教育理念や制度の意味を意識してはみても、立ち止まって考える余裕などない、というのも正直なところである。しかし、ここ数年間の蓄積によって、多少とも明確化してきた問題意識もあると思う。

初習言語カリキュラムの骨子としては、①1年次必修科目の週2回ペアクラス、②セメスター制、③1年次後期からのコース分け、④必修科目修了者のための自由選択科目の設置などが挙げられる。全カリの理念や制度の詳細については『立教大学〈全カリ〉のすべて』（東信堂）に譲るとして、上記の骨子を意識しつつ、全カリ言語構想小委員会での話題や、他の教員との個人的な意見交換、学生へのアンケートの結果、私自身の経験などを踏まえて、思いつくところを述べてみよう。

1. 1年次ペアクラスと、COC以外の必修科目

余談になるが、「ペアクラス」という言葉は新たに出講依頼する非常勤の先生方の誤解を招く場合がある。一般的に「ペア」と言えば、2名の教員が

ペアを組むことが想起されるからだ。が、周知の通り、立教で言う「ペア」とは、日課表上2つのコマがセットになるという意味で、原則として1つのペアクラスに1名の担当者が当たることになっている。いわゆる第二外国語に関して週2回展開を実施している他大学の例のような、一方が文法のクラス、もう一方が演習（文法のみには偏らない、表現・会話等）や講読のクラス、といった二本立て展開とは全く異なるわけだ。

実際には事情が許さず、2名の教員が1つのクラスに当たるケース（言葉は悪いが、いわゆる「ペア崩れ」）もあるのだが、以前は「多角的に学べる、役割分担により学習にメリハリが出る」などの、ペア崩れなりの利点に関する意見も耳にしたものだ。多様性を重視するなら、いっそのこといわゆる二本立て展開にしまえば良いではないか、という考え方もあり得るかも知れない。とは言え、我々がペアクラスで目指すものは《密度の濃い指導》である。言葉のある程度身につけるには、初歩段階での学習頻度の高さや継続性が必要で、その主眼は、単に〇〇語の授業が週2回あるということではなく、一貫した教育展開においてその頻度が高いことにあるのだ。そうなると、連携維持のために担当者に負担を強いる上に、学生にも戸惑いを感じさせる「ペア崩れ」よりも、1名の担当者が当たる方式の方が良いのは当然だ（現実

に「ペア崩れ」のケースをご担当の先生方は、私が今述べた問題点にもかかわらず、密に連携を保ち、適度に役割分担をして少しでも効果的な指導をするよう努力されており、この点、本当に頭が下がる思いであるが、ペア崩れを極力避けることは運営上いつも苦心している点である）。

教員2名による担当や、二本立て展開によって得られる多様性が無駄だということではない。ただ、十分密度の濃い指導をし、当該言語について全く白紙の状態の学生に基礎力を身につけてもらうには、異なる2つの授業が週1回ずつあるような（世間的に言うところの）「ペア」だと、学習者の負担の割に習得効率について疑問がある、ということだ。週2回展開の利点は、担当者が通り一遍の授業に陥ることなく練習問題などの手を変え品を変えながら、学習事項を定着させる工夫を発揮出来るという点にあるのだと思う。ごく限られた時間で基礎学習を定着させる上では、一貫した指導の中での練習問題の多角性こそが重要なのではないだろうか？全カリ言語教育の理念の一つである《コミュニケーションのための十分な言語能力》を育成するためには、学習達成度の各段階に応じて、既習事項を応用した自己表現練習をやる、新たな学習事項と既習事項とを連携させた練習問題などによって言語知識を効果的に定着させる、口頭発信や聴解のために丁寧に時間を割くなど

(改めてこう書くと当たり前の事ばかりになってしまうが)といった要素を、どの段階でどの程度盛り込むか、といった観点に立った教材の選択・作成や指導方法考案のために、不断的努力と切磋琢磨を続けて行かなくてはならないことは言うまでもない。

さて、週2回展開の場合、学生はほぼやばやしているとすぐに次回の授業の日がやって来るので仲々気が抜けない。加えて、初習言語は原則上「平常点評価」ということになっているので出席状況も良く、課題などにも割合真剣に取り組んでいるように思える。出席さえしていれば身に付くほど生易しいものではないが、少なくとも初歩段階の学習成果はまずまずではないだろうか?学習を始める段階で既にその言語圏について強い関心を持っている学生は実際には案外少ないようなのだが、初習言語の学習を通して興味を持ち、2年生や3年生になってから休みを利用して旅行に出かけたり、語学留学や検定試験に挑戦してみるといった学生が(全体からすればまだ少数とは言え)ある程度存在するのは嬉しい限りである。こうした自主的な目標設定や学習継続意欲を持つに至る学生が更に増えるような指導や刺激の与え方についても、考え続けていきたいテーマである。

ここまでは良い点ばかりを述べたが、中には学習意欲のない学生、何らかの理由で出席不良に陥る学生もい

て、ほとんどのクラスである程度の数の不合格者が出てしまうのが現実である。更に細かく見ると、「入門」(1年前期)では合格率は概して高いが、「総合」(同後期)の合格率は前期よりも低くなる傾向がある。入学当時の新鮮な気持ちが薄れてくる、という学生側の原因も一つにはあるだろうが、学習内容の面についても検討を要する点だ。例えば私が担当しているスペイン語を含め、ヨーロッパ系の言語の場合、言語形式を覚える上で最も負担になるのが動詞の活用である。実を言うと、動詞の学習を現在形の範囲に限っただけでも、最重要の表現形式のかなり多くを同時に学ぶことが出来、自己紹介や初歩的な会話等の練習もこの時期にある程度導入可能だ。そのため、前期では現在形を中心にその言語の基本的な表現構造を丁寧に時間をかけて教える展開が可能だが、後期では過去・未来等の多様な動詞形式を覚えることが中心となって、詰め込みになりやすいのである(中国語の場合はまた別の事情があるだろうが)。前期と後期の学習内容の配分は今後改めて検討すべき課題だと思う。

1年後期で消化不良に陥った学生がどうか単位を取って2年生のLCC(いわゆる「言語文化コース」)に進んでも、本格的な文章を読んだり、より複雑な表現構造を使いこなしたりといった学習について来れなくなるのは必定で、暴露するならば、1年次科目や

COC に比して LCC の不合格率は高い傾向にあるのである。LCC では担当者の個性が十分に発揮されており、現場の我々が教材や授業方法について考える際には、どうしても1年次科目のことが先に頭に上ってしまうのだが、一方で、1年次で未習の事項の学習や、既習事項をもう一步突っ込んだ学習をLCCにおいてどう導入するか、本格的な検討を始めるべき段階に来ているように思う。

2. セメスター制，コース分け，COC

英語と違って初習言語の場合は、ほぼ全員が全くの初学者である。1年後期から一部の学生がCOCに進み、残りの大部分は「総合コース」に進むが、実際には「入門→総合」という連続の中で1年かけて一通りの基礎を学ぶというのが現状である。セメスター制について言えば、各期ごとに評価を出すというメリハリはしっかり学習してもらおうと利点になるし、前期と後期の成績の違いといった重要なデータも手に入るなど、歓迎すべき点も多い。だが、「入門」から「総合」への移行に当たってクラス編成が変わる事態だけは多くの担当者が避けたいと考えている。

それはそうと、気になる問題は1年後期からのコース分けである。COCには人数制限があって希望者のみが進む（定員オーバーの場合は前期の成績によって選抜される）ので、概してや

る気があって優秀な学生が進むという期待が成り立つが、そうは言っても、4月から3ヶ月間「入門」を習っただけなので、ネイティブ教員による「コミュニケーション」な授業について行くには文法や表現に関する基礎知識がまだまだ不十分なのである。もちろんCOC担当者には、文法も段階的におさえつつ展開するよう依頼してはいるが、「基本文法を知らな過ぎるので教えるににくい」という感想はCOC担当者が頻繁に漏らすところである。

学生に対するアンケートでは、コース分けの時期について「現行通りで良い」という回答の率が最も高いが、その一方で、（少数ではあるが）「1年前期からが良い」「2年前期からが良い」という回答が同程度存在することは注目に値する。「最初からCOCのような形で学べればもっと良かった」と思う学生もいれば、逆に「1年間基礎固めをしてからCOCで学んだ方が良かった」と思う学生もいるのだろう。1年前期が終わる段階でCOCに行くことを躊躇したが、もし可能ならば2年目からそういう授業を受けたいと思う学生もいるに違いない。アンケート結果をみただけでは、あくまでも憶測でしかものを言えないが、担当者が学生から「2年次からCOCに行くことは出来ないのか？」と個人的に質問を受けるケースもあることを付け加えておく。「ある程度のコミュニケーションや自己表現が出来るようになった」と

いう点についてはCOC履修者の満足度はかなり高いが、その一方で、アンケートの自由記述欄には「文法を正しく理解出来ているか不安だ」という旨の発言も多い。

現行の制度下では、1年前期における文法事項等の学習ペースを早め、COCでの学習に十分耐えうるだけの基礎を少しでも多く与えておくという考え方もあり得るが、その一方で、1年前期の段階で、COCへの橋渡しとなるような口頭表現や簡単な会話等の練習を積極的に導入すべきだという考え方も成り立つかも知れない。忘れてならないのは、COCに進まない学生にも「ある程度話せるようになりたい」という希望があるという点だ。「入門」で文法を詰め込んで後期から始まるCOCに備えるという考え方だけでは通用しない。I. で述べた「入門」と「総合」の学習事項の配分とも絡めて、この辺りのバランスをどう取って行くかについて、突っ込んだ検討はいずれ必要になるものと思われる。

私自身の反省の意味でも言うが、漠然とであれ「COCは特別、『総合』とCOCは別立て」といった感覚があるとすれば、それは誤りである。無論両者は同じものではないし、COCは全カリ言語カリキュラムの「目玉商品」でもあるから、特別と言えば特別ではある。しかし、両者の差異はあくまでも、初習言語の学習目標という全体的なビジョンの中で意味づけられた差

異でなくてはならない。コース分けの問題を契機として、「入門」でどこまで教えるのか、「総合」はどこからどこまで、LCCでは何をやるか、COCはどの程度の水準を前提に始めて、1年後期でどこまで目指し、2年前期でどこまで目指すのか、等々……、初習言語教育全般の見通しを問われているように、私は感じる。

3. 欲張りな言語教育のために

全カリ言語教育の重要な理念の一つに《異文化理解》というものがある。もっと言えば、発信面も含めた《異文化間対話》ということだろう。そのためには言語の運用能力が必須であるが、運用能力とは、小手先の会話力のことではない。とりあえず喋ってみる、相手側の世界に入って行ってみる、という豪胆さや臨機応変さは言語習得にとって重要だが、真の対話のためには、小手先の道具として言葉を操れるだけでなく、言葉を通してその背景にある文化を理解することが必要で、それには、発信型の言語教育の中でつい軽視されがちな「受容」の能力、そして、踏みとどまってじっくり読んだり考えたりする姿勢が是非とも必要である。一方、だからと言って、日常的なつまらない事柄を当該言語で正しく表現出来るようにする、いわば道具としての学習に習熟することが薄っぺらなものだとも言い切れない。何故なら、言葉の交換を通して共感を覚えたり、逆に

批判精神を刺激されるような、真の対話の能力を養うには、一見何の変哲もない内容の、道具としての言葉そのものの中に、表現構造や発想の面白さを覚え、それを自分なりに使い回してみる楽しさを感じながら学習していく過程は不可欠だからだ。

上のように考えるなら、COCでも読み書きに重きを置いた作業をある程度導入すべきだし、LCCにおいても、読み、知り、理解するだけでなく、書くことを通して自分の考えをまとめて表現したり、少しは口頭での自己表現にも挑戦するなどの要素が求められるはずだ。言葉が本来そうであるように、全カリ言語教育は何と欲張りであることか。

学習の過程としては当然、中級・上級相当のコースは初級からの蓄積の上であり、教える者はいつでも、導入期の学習に最も神経を割くものである。が、中級・上級レベルの学習目標を見直すことから逆算して、初級段階の学習のあり方を探るという視点も忘れてはならないと思う。

ここ数年の間に、自由選択科目の履修条件が変わって履修しやすくなり、一部の言語では新たな自選科目の設置が進められるなど、必修修了後の学生のニーズに応える（学習継続の意欲を鼓舞する）ための努力も行われている。新座2学部は完成年度に達し、自選科目や再履修クラスのキャンパス越しの履修も可能になった。旧カリ時代の学

生への対応も特別認定試験制度から個別指導へと移行し、徐々に問題を解消しつつある。制度上の大きな枠が落ち着いてくる中、欲張りな言語教育の中身を徹底的に整備してゆく第二段階に、全カリ初習言語は突入したのだと、今私はひしひしと感じている。

さとう くひこ
(本学社会学部助教授、
スペイン語教育研究室主任)